

ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

# ニュースレター

8号

発行 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA  
発行日 2009年9月1日  
住所 滋賀県近江八幡市永原町上16

独立行政法人福祉医療機構（「長寿・子育て・障害者基金「一般分」）助成事業

## 夏の企画展



2009年6月14日（日）～8月16日（日）

「顔」は、私たちが社会と結びつくために実際にさまざまな役割を果たしています。時には言葉や行動以上に、私たちは「他者の顔」から様々な情報を受けとることもあります。

目、鼻、口とその要素は単純なのにもかかわらず、それらのカタチの変化によって「顔」は様々なメッセージや感情を見る人に与えますが、それはある意味「記号」のようではないでしょうか？

そんな「顔」に対する疑問から始まった今回の企画展は、10クラス分の女学生と先生に扮して集合写真にした澤田知子と、ひたすら同じ服装、同じ表情の「お母さん」を描き続けた芝田貴子から始まり、陶器も絵画も「目・目・鼻・口」の点の集合体を表現する吉川秀昭の3人を一階に展示、外に出で蔵には、学校のプリントの裏に顔が鏡文字となっている人物を描き続けた藤野友衣を展示しました。

2階に上がると、太く黒い線で流れるように人に近い動物たちを描いている鈴木藍、「志村けん」が大好きで、クレヨンの激しい塗り込みで描く平野信治を対照的な形で展示し、最後には、独特的のデフォルメで人物を描く大久保寿を床の間に厳かに展示を行い、7人のそれぞれの作家の表現を個々に鑑賞できるよう工夫しました。

また、ライブラリーコーナーも去年の岩崎司展以来の1年ぶりの復活。座りながら作品や本をのんびりと見つつ、お客様同士で意気投合し、作品の感想をお話されている方もいらっしゃいました。ライブラリーコーナーは、「顔」と「顔」を見ながら「顔」の作品について話をしてほしいという思いから設置していましたが、作品だけではなく、顔を合わせて話をする、人ととの触れ合いの大切さを感じていただけるような展示になったと思います。



「顔」展関連イベント トークショー

## テーマ 「顔は誰のため？」

小林昌廣氏（情報科学芸術大学院大学メディア文化センター長・教授）

2009年7月11日（土） 野間清六邸

（抜粋）

発達心理学のある実験で、赤ちゃん（乳児）にお母さんが色々な表情を見せると、瞬時にその表情を真似ます。すっぽい顔や、眉間にシワを寄せた怒った顔、笑顔など、表情が伝染していくんです。学生時代に、お母さんの顔とそれを見た赤ちゃんの顔がどれくらいの時間で一致していくか観察したことがあります。この実験はお母さんじやないとダメ。お父さんじや全然真似てくれません。お父さんはこの実験をやると必ずいつも悲しい顔をしてしまう。だって自分の子がちっとも真似てくれないから。ナースやお医者さんや、僕ら学生でもダメ。ずっと見てはいますよ、顔の表情を。でも真似はしない。

顔の中で特に動くのは目と口で、お化粧でもアイシャドーや口紅を子供が最初にいたずらして塗ってみる。赤ん坊でも一番動くところをちゃんと見ます。脳科学の世界で、ミラーニューロン、鏡としての神経細胞、頭の中には鏡のような神経細胞がたくさんあると考えられていて、それは、外部にあるものを映しています。それを頭の中で模倣できる。誰かが蕎麦を食べるのを横で見ていて、自分は食べていいなくても、頭の中で模倣していて、いざ蕎麦を食べる時スムーズに食べられるというものです。だから、やったことが無い事でも、様々なパターンがインプットされていて、それが実際の行動に出る時に、外を見るのではなくて、自分の頭の中の鏡を見ることによって、行動が実現できる。赤ちゃんもいくつか表情のバリエーションがインプットされていて、お母さんの時だけ反応しているのかもしれません。生後4週間くらいですでに表情ができる例もあります。表情筋というものはだいたい26種ほどありますが、赤ちゃんはまだ全部はできていませんが、すっぽりそな顔なんて見事に口をとがらせて目をつぶっています。そんなに羊水の中はすっぽりかっただのかというくらい。そういう関連から、赤ちゃんの表情から母子関係もうかがいしることができます。

（抜粋）

顔は、誰のためっていうほどちゃんとしたものはないですが、顔がさすとか、顔を立てるという言葉がありますが、それは、対社会的な、対人的なものとしてあるんだということです。昔は、主体と客体とか主觀と客觀とか自分と自分でないものとはっきり区別したんですが、今は逆に、自分じやないものがいるから自分がいる、他者がいるから自己がいるという考え方によって「顔」というものが成立しているのではないかという話なのです。

三島由紀夫が新宿にある美容形成外科を訪れた時の良い文章を書いていて、「表面だけ変えて何になる」と思って取材したが、そこで感じたものは「一番深いところを知る事によって、かえって最も深い所の重要な部分が見えてくるのではないか」と。“ザイン（存在するよりシャイネン（そう見える）”と書いてあるのですが、つまり「～のように見える事」が重要であることを言っている。健康より健康に見える事が重要な時代が来るだろうと、半世紀近く前に予言しているわけです。本質を見せるよりも本質ばく見ればいい、そのように見えればみんな納得するという、顔でも体でも何層にも武装して社会に出て行く、それはまさに今の日本の文化を象徴しているのではないでしょうか。

いったい顔が誰のため？と聞かれたら、「誰のため？」って相手に聞いてみて、相手の不思議な顔を見ると、「ああやっぱり自分のためではないのだな」と分かると思うのです。常に相手に「誰のため？」と問い合わせ続ける教訓の言葉として今日のタイトルに致しました。



# アロイーズ

私の愛は蝶のように飛び去った…

2009年2月3日(火)～3月29日(日)  
〈第一会場〉 NO-MA



日本初のアロイーズの大規模な巡回展覧会は、NO-MAから開催されました。とても印象的だったのは、14メートルにも及ぶアロイーズの大作を展示する作業中、ジャクリーヌ・ポレ＝フォレルさんは何時間もそれに立ち会い、感慨深げに見られていたことでした。自宅の床に広げて見るしか手段が無かった彼女にとって、壁に飾られた状態は初めて見るものだったのです。

この未発表作品が公開されることは、50年にも及ぶジャクリーヌさんのアロイーズ研究が日本で花開いたことを意味していました。

アロイーズ展ではあと2つ素晴らしい成果を残しています。1つは図録です。3ヶ国語で翻訳されており、ジャクリーヌさんの論文やデュビュッフェの文章、アール・ブリュットの研究者が勢揃いした充実の内容の労作です。

フランス語以外の図録は作られた事が無いので世界的に見ても価値の高い参考文献と言えることでしょう。残る一つはスケッチブック。これはアロイーズの描いた未公開のスケッチブックの完全複製本です。日本の印刷技術は世界一と言われるだけあって、並べて見ても質感から色合いまで本当にそっくりに出来上がっています。展覧会をご覧になった方はオリジナルの横で複製本をめくって多くのページをご覧になれたかと思います。

貴重な資料を展覧会に合わせて作り上げていくことが出来た事は、今後のアール・ブリュット研究に大きな足跡を残す事が出来たと言えるでしょう。

展覧会は多くの人に作品を見ていただくために開催するわけですが、今のために正確な資料を作成する事も重要な役割となります。

NO-MAでは好評にて展示期間を延長するほど人気の展覧会となったアロイーズ展は東京のワタリウム美術館で開催され、秋には北海道立旭川美術館で展示されることになっています。

それぞれ展示方法を変え、様々な角度からアロイーズの芸術を見られるよう工夫しています。是非、日本の多くの方に見てもらいたい展覧会です。



アロイーズ展と同時開催のこの展覧会は、日本精神看護技術協会と当ミュージアムとの連携による作品調査事業の中から発掘された作品群によるものです。

今までその発見の糸口が困難だった精神障害のある方々の優れた作品展の本格的スタートともなる本展は、代島治彦氏の現場撮影による映像と共に、強いインパクトを与えた企画となりました。

「アール・ブリュット」という概念は、障害者の芸術を指す言葉ではありません。しかし後に「アール・ブリュット」を命名し、その作品の発掘収集に情熱を傾け続けた美術家ジャン・デュビュッフェの活動期の前後1920～50年当時、主に精神に障害をおった人々の表現の発見がメインであったことは事実です。そして彼らの作品に対して新しい価値評価をもたらしたこの概念は、「表現」というものが人間の心の深層に眠っているイメージの豊かさや不可思議さに光をあてるようになったのでした。

当然のことながら、日本にもそのような作品は存在します。韓国から1名、日本から4名の作品で構成。期間中は企画者によるギャラリートークや、精神看護学の末安民生先生(慶應義塾大学教授)によるトークなどを開催し、多くの観客が非現実世界の夢想に、並々ならぬ関心と共感を示されました。

また、この企画は7月4日～26日まで、東京の0美術館に巡回され、末安民生先生や作家田口ランディさんによるトークショーも開催されました。



日 覚めぬ夢  
～日韓のアール・ブリュットたち～  
2009年2月3日(火)～3月29日(日)  
〈第二会場〉 旧吉田邸

## 「アール・ブリュット作品との対話～心の病と表現衝動～」関連イベント

開催日 平成21年2月7日(土)  
場所 近江八幡市立かわらミュージアム企画展示室  
開催記念講演「アロイーズの宇宙へーアロイーズの芸術と生涯についてー」  
ジャクリーヌ・ボレ＝フォレル(医師・アロイーズ財団会長) 通訳:片岡文子



この作品というのは日本語で言うと「劇場の間仕切り」という意味の作品です。そういうタイトルの長い巻物の絵です。

どうしてこの作品を紹介するのかというと、この作品を紹介することで一つはアロイーズの生涯を知ることができます。

その病院に入院中の彼女と私は出会うわけです。

それが、「劇場の間仕切り」という絵を見ていただきたいと思います。

この絵巻物と言ってもいいと思いますが、ひじょうに長いです。この絵はアロイーズの作品としては長さ、大きさそして重要性からいって最もも価値のあるアロイーズの作品だと思います。

これは、アメリカのジョン・マクレガーというアール・ブリュットの研究者がいるのですが、その人に言わせると、これはバチカンにありますシティーナ聖堂に匹敵するぐらいの作品である、ということです。

この絵巻物は14メートルあります、ここに何が描かれているかというと、アロイーズの46年にわたる半生について。つまり非常に情熱的な恋、そしてそれが引き裂かれてしまう、そして自分の病気、そしてまた現世から自分が離れてそして新しい創造の世界に自分が生まれ変わるという半生が描かれています。

この作品ですが、アロイーズの芸術が最高潮にあった作品だと云えるし、芸術の大きな転換の作品だと云えます。アロイーズは、ずっと病気を抱えていましたが、その病気のつらさを全て絵にぶつけているともいえます。そういう意味で彼女は絵を描くことによって自分を治療するということをしていたのかもしれません。実際、彼女はこの絵を描いたあと数週間、絵を描かなくなっています。また再び絵を描くのですが、それまでは意味のはっきりしない絵を描いていましたが、その後の絵は非常に静かな落ち着いた絵に入れ替わっていくのがわかります。

私がこのアロイーズのことを知ったのは1941年のことでした。もちろん、彼女の作品に魅了されたのですがどうしてその作品を見る機会を得たのかといいますと、当時、私は学生で、ステック先生という方の授業を受けていて、そのステック先生が精神科医だったのですが、その先生からアロイーズが描いた絵を見せられたことがあります。

今日はアロイーズの数々の作品をみなさんに紹介するというのではなく、ひとつだけ作品を取り上げてご紹介していきたいと思います。

彼女は精神病院に入るんですが、結局良くならないとい

## トークショー「アール・ブリュットと鍼灸術、そして密教の世界へ」

ジャクリーヌ・ボレ＝フォレル(医師・アロイーズ財団会長)  
正木見(宗教学者・慶應義塾大学非常勤講師)  
工藤和彦(本展アートディレクター)

(抜粋)

工藤：なぜ、密教か。今回のアロイーズ展の圖録に掲載する文章を書くにあたって、僕自身が文章を書くことになるわけですが、西洋の文化、歴史、芸術についても相当詳しくないアロイーズのことについては書けない、と、半ばビビっていたんですね。家族はそんな彼女に手を焼くようになり、1918年の2月イスのローザンヌにあるセリー大学付属の精神病院に入院することになります。そこで2年ぐらい入院していましたが、だんだん彼女の状態は悪くなってしまって行きました。

彼女は精神病院に入るんですが、結局良くならないとい

正木：このようなマンダラ的な世界を現代に活かすにはどのようにしたらいいかということでも、もともとエンゲ派の人たちが始めて私もそういう關係のお医者さんから学んだんですが、それを改善というか変えて、もっと現代的な形でできないか、ということ。

日本では病んだ人を治療するためにエンゲ派を使っていましたが、私は健常者が自分自身の精神的な世界をあるいは体の鬱子を把握するのに使えないかとも考えています。その中で、僕が本屋で見つけて購入して読んだ本がこの「マンダラとは何か」という正木先生の本でした。この本を読みしていく中でもしろかったのは、マンダラの教義がエンゲというイスの心理学者がマンダラを研究していたり、世界のマンダラには共通点があったり、精神疾患のある人はマンダラのような絵を描くことがあったりということがこの本に織られておりまして、「これ、もしかしたら近いのかな・・・」と思って、正木先生に恐縮ながら電話をしてお話をさせていただくと、実はそうなんじゃないかとということをお聞きしまして、僕もアロイーズとマンダラ、密教を詰ひつけて文章を書きました。

今日は正木先生にお越しいただきましたので、マンダラについてお話ししたければと思いま

正木：日本の場合は真言宗、天台宗が密教と結びついています。実際には、日蓮宗も密教的な要素を持っていますし、曹洞宗は7割が密教なんですね。皆さんが曹洞宗というと永平寺で道元で座禅というイメージでそれとともに、永平寺、道元派というのは2割5分ぐらいで、7割5分ぐらいは密教をやっています。日本の庶民信仰というのはほとんど密教になってまいりまして、つい2月3日に私も東京の門前町にあります深川不動尊で豆まきをやってきました。東京で言えば成田山、新勝寺、川崎大師、高尾山、そういうものはみな密教なんです。密教もいろいろありますし、調べるとインドで今から2400年から2500年前にスタートしたんですねけれども、いろいろな変遷をいたしまして、大体6世紀から10世紀にかけて大乗仏教の一番最後の形が密教だったんです。特徴といいますと、神祕主義的な傾向が大変強いのと、それまでの仏教が、ものすごい長い時間修行をしなければ悟れないという、のに対しまして、密教の場合は生きているうちに悟れるよ、というのが売りだったんですね。その中で、悟りのためのひとつ道具というかツールとして開発されたものがマンダラだったわけですね。



## アロイーズ展／目覚めぬ夢展トークイベント 心の病と表現衝動

2009年4月26日 (日)

末安民生(慶應義塾大学看護医療学部准教授)  
はたよしこ(ナビゲーター/NO-MAアートディレクター)

### 《精神医療現場における表現のとらえ方》

はた：精神障害の方の看護現場経験も豊富な末安先生には、私たちの知り得ない具体的なお話を伺いたいと思ってます。まず、たくさんのアール・ブリュット作品がジャンヌ・デュ・ピュエフによって発見収蔵されていた今から約5～60年前の医療現場、特にヨーロッパでは、どのような精神治療の状況があつたのでしょうか？

末安：実は1950年代前後、世界の精神科の医療世界は大転換の時期と考えられておりまして、精神科のお薬が本格的に登場した1952年と言われております。

それはクロルプロマジンというお薬で今までずっと使われています。その薬は簡単に説明すると麻酔薬を作ろうと開発している途中で偶発的に精神科での薬理効果が見されました。ある種の人達に対しては、眠らないけれど落ち着く様子が見られたのです。それまではもっと原始的で、1930年代から電気けいれん療法や聞いたこともある方もいると思いますがボロボミーといって、重症患者の場合脳を直接傷つけるような治療法です。今から思えば限られた治療しかできなかった反面、病院の中にはかなり自由もあったともいえます。

その頃には、芸術的な活動がいろんな病院内にあったと考えられます。医学的に言えば症状が抑えられる状態が作られ始めたという事ですが、芸術活動という視点でいえば停滞の時期に入ったと言えなくもないですね。

はた：自発的に絵を描かれる方もいらっしゃいますが、一般的に芸術療法というものがよく比較対象に出されます。そこにはどのような違いがあるのでしょうか？

末安：芸術療法は、活動療法に入るのですけれども、2通りあります。絵や陶芸、書道等を教える方が外から来られて行われる場合と、精神科医が、自分で研究対象として広い意味で治療に使うというのと。例えば、具合が良くない時に描いた絵と、良くなっている過程で継続的に描いた絵とによって、いろんなものが見えてくる。例えば箱庭療法などもそうです。箱の中に砂場を作り、家、動物、人形等を好きなように組み合わせ、言語ではなく創造してゆく。ご本人の中で、今までバラバラだったり自分の感情を表現できなかつた人が言葉ではない方法で表現できるようになる等の効果があります。

はた：アール・ブリュットの概念の起源の話の中でよく出てくるのが、ドイツのハンス・プリント・ホルン医師が出した「精神病者の創造性」(1922年)という本です。そこには症状と共に多くの作品が掲載された非常におもしろい作品集みたいなものでした。それが当時の画家達に影響を与え、その後から精神病院にアーティストが行って、作品を見たわけですが、中でも超熱心な一人が、ジャン・デュ・ピュエフといい作家だったのです。そういうのは、例えば日本では出版されたりした歴史はないのでしょうか？

末安：芸術療法学会など以外には無いのでは…。

日本芸術療法学会では、40年前から研究が精神科医や心理療法士によって担われていますが、あくまでそれは、研究の対象なので、広く一般社会に対してのメッセージ性を持つことではないですね。精神病になった人の治療を本格的に始めた地域として記録に残っている京都の岩倉村という所では、医療資料の一部に患者さんが描いた絵が載っていました。しかし闇闇を持って考察したり、体系的な収集が行われていたわけではないですね。その理由の一つとして、歴史と文化の違いがありますね。

ヨーロッパではコロニーみたいなものも含め、精神病患者に対してキリスト教修道院の一部が収容や治療の役割を始めましたが、日本の場合は精神病監護法が1900年に制定されています。今は精神病患者は厚生労働省の管轄ですが、その当時は内務省といつて警察が精神病患者の事を取り締まるという法律でした。それが、日本の精神病患者に対しての実質的に初めての法律でした。それからも分かる通り、医療というより取り締まりの対象だった。医療と捉え始めたかから60年くらいですから。関心のあった人はいたかもしれないけれど、書籍や論文によるには、更に時間がかかる。キリスト教会の中にあったヨーロッパとは違う大きい違いがあります。

## 《障害と表現》

はた：アロイーズは50歳くらいから本格的に絵を描き始めましたが、入院生活が始まった30歳くらいからすでに同じテーマで描いていました。4～50年同じテーマで想像世界を構築し続けたということなのです。先生の立場からみてどうお考えですか？

末安：分からるのは、アロイーズの頭の中に描きたい世界がすでにあって描いたのか、描いてみたらそうなっていたのか、後でまとめて見てる私達は、同じテーマをずっと続けていると思いますが、本人は明日どう描くかなど考えていないように私は思う。「目覚めぬ夢」展の山崎健一さんのグラフ用紙に描かれている作品も、遠くから見ると全部同じに見えるが、よく見ると全部違うのです。ひたすら今日のこの時間を使って自分の時間を過ごしている。50年ずっと続けるのは大変だなと思うかもしれないが、アロイーズも一瞬一瞬だったのではないかと思われる。むしろ、なぜ描くことになったのかきっかけを知りたい。「持続する闘心」というか、「こころの動き」を何とか表現したいという衝動というか。

末安：別に単調にしたいわけではないのですけれども、今の病院は医療提供の場なので安全が第一にあるのですね。

しかし一般的な医療事故と違い、精神病院は少し意味が違っているように思います。単調で時間の経過が分かりにくいやうな生活だからこそ、自分の世界にこだわるというか。普通家計簿というのは、ぶり返し目的を前提として書くのですが、それではなく自分が今ここに居るそれだけの記録なのだから置く所が無くなってしまうとしても、本人も執着はしない。それからまた、これは表現といえるのかどうか分かりませんが、私が20歳頃の学生の時に、山形県の山間部の施設で、気温が零下12度くらいになってしまった夜中の2時になると、廊下を素手で雑巾かけをしている人がいたのです。最初その人を見た時、「この人は、反復的な脅迫の状態」と思った。手はアカギレだし私も必死になつて何度も止めましたが「やめねえ」とはっきり言うのです。これをやつたら何がスッキリするのか、何か罪をつぶなっているのか、いろんな事を考えましたが、そんな事は意味がなかった。その人は誰もいない所で、しかし頭の中にあるうちは誰も見えない、自分も見えない。

でも、それを具体的な形にすると、初めて自分も他人も見ることができる。それは大きな爽快感のようなものになり、それをどんどん繰り返すと、何か確信いたものが自分の中に積み上げられていくという感じは私にもあります。「目覚めぬ夢」展の土屋正彦さんは、死んだお父さんといつも自分の中にいて、宇宙の王となつたお父さんと確信を持って交信しているのです。「この病院の地下にも親父と自分の研究室がある」と真剣に話します。その頃には、医療活動といふよりも、分析ができるかもしれないけれど、本当の所は分からぬでないかな。

はた：私も絵を描くので、特に思うのですけれど、自分の頭にイメージとして持っているものって皆それありますよね、しかし頭の中にあるうちは誰も見えない、自分も見えない。

でも、それを具体的な形にすると、初めて自分も他人も見ることができる。それは大きな爽快感のようなものになり、それをどんどん繰り返すと、何か確信いたものが自分の中に積み上げられていくという感じは私にもあります。「目覚めぬ夢」展の土屋正彦さんは、死んだお父さんといつも自分の中にいて、宇宙の王となつたお父さんと確信を持って交信しているのです。「この病院の地下にも親父と自分の研究室がある」と真剣に話します。その頃には、医療活動といふよりも、分析ができるかもしれないけれど、これが病理的で、これをやつたら何がスッキリするのか、何か罪をつぶなっているのか、いろんな事を考えましたが、そんな事は意味がなかった。その人は誰もいない所で、確かに満足いくようにして安心を得ようとしていた。できたかどうかは微妙だけでも、これを病理的で、薬を飲ませて眠らせてしまうような治療的変化を求めるよりも、その前にやることがあるなどつくづく感じましたね。こだわりの正体というか。

はた：興味深いお話を。表現といふのは何か作ると思

いがちですけれど、夜中の2時に雑巾かけというのも一つの表現方法なのかもしれません。今日は、たくさんのお話を伺え

てほんとうにありがとうございました。先生にはまた今後とも私

たちにご協力をいただきます。どうぞよろしくお願いいたします。



はた：そんな中で発見されたお一人で「目覚めぬ夢」展の高橋重美さん。末安先生が彼の描いた大学ノートを滋賀に直接持って来て下さった、その直前に200冊ほどが本人も納得の上で焼かれて廃棄されました。今回展示している7～8冊で全てなのです。でも全部燃やされて跡形もなければ、展示には至らなかつてしましました。で、今回の場合は日本精神看護技術協会を通じて1200以上の精神病院と、地域の訪問看護をやっている施設も併せた1600の会員施設に、「精神障害の方で表現をしている人がいたらどんどんお知らせ下さい」というのを、滋賀県社会福祉事業団の皆さんと一緒にやらせてもらつたのです。応募を受けた中で、発見した人がいるわけですね。

ヨーロッパではではコロニーみたいなものも含め、精神病患者に対してキリスト教修道院の一部が収容や治療の役割を始めましたが、日本の場合は精神病監護法が1900年に制定されています。今は精神病患者は厚生労働省の管轄ですが、その当時は内務省といつて警察が精神病患者の事を取り締まるという法律でした。それが、日本の精神病患者に対しての実質的に初めての法律でした。それからも分かる通り、医療というより取り締まりの対象だった。医療と捉え始めたかから60年くらいですから。関心のあった人はいたかもしれないけれど、書籍や論文によるには、更に時間がかかる。キリスト教会の中にあったヨーロッパとは違う大きい違いがあります。

満ち足りない環境、欠損状態の中で、表現をすることの力といふのがあるのですね。画材屋に行くと溢れんばかりの豊かさです。堂々と何十年にも渡って、大学ノートとボールペンだけでこれだけ描き尽くすというの、「欠損の力」です。

# 次回開催展覧会 イベント案内

第6回滋賀県  
施設合同企画展



～障害のある人の進行形～

今年で第6回目を迎えます「滋賀県施設合同企画展ing…障害のある人の進行形」。新たな顔ぶれも加わり、県内19施設、県外2施設と合計21の施設が集まり、障害のある方から現在生み出される作品を展示します。

今まで、作品の選定は自由（担当者が面白い、素晴らしいと思うもの）だったので、今回はそれに加え、作者その人が存分に表現されている作品（その人独自のルールにのっとったもの）に焦点をあてました。

ヒョロッとしたか細い紙飛行機にこれまで細い足が付けられた立体作品、1mm程の陶で作られた砂、一ヶ月分の昼食を丁寧に書かれた献立表…等々。それは、日々の中で、着々と積み重ねられた搖るぎない形跡。

一見すると、あまりにも独走的で日常的で「これが作品か！？」と見過ごされそうですが、よくよく観ると、よくぞこのルールをあみだした！と思うような表現がぞくぞくと展示されています。どうぞ御覧下さいませ。

## 関連イベント

### ・オープニングイベント

日時 2009年9月5日(土) 13:30～14:30

内容 出品作家、造形担当者によるギャラリートーク

定員 20名 参加費 無料

## 休館日

- ・月曜(月曜祝日の場合翌日休館)
- ・年末年始12月28日(月)～1月8日(金)

会期 2009年9月5日(土)～  
10月12日(月・祝)



社会就労センターあおぞら 飯原政晚

### ・クロージングパーティー

2009年10月12日(月・祝) 14:00～15:00

内容 ガムランコンサート[出演:HANA★JOSS]

定員 20名 参加費 無料(要予約)



社会就労センターこだま 中野裕太

## 地域交流事業 「八幡山に天狗を探せ！」

2007年から行っている地域交流事業ですが、今年は八幡山をベースにした「八幡山に天狗を探せ！」を行います。八幡山は、市街の北側に位置し、標高271.9m、鶴翼山とも呼ばれています。今回はそんな八幡山を散策しつつ「天狗」にまつわる企画を2009年8月～2010年3月までの四季を通して行う、1年プロジェクトになります。

1回目はこの夏、8月30日に「天狗の住処」というテーマで、八幡山の竹や、自然のもので天狗の住処を作りました。

その後は秋「天狗絵巻」、冬「天狗の紙芝居」と続き、最後の春には「大天狗展」として2010年3月13日(土)～3月21日(日)まで、当ミュージアムで1年間の試みを一挙に展示する予定です。

地域交流事業ではありますが、近江八幡市外の方の参加も大歓迎！各企画定員30名、予約が必要となります。（先着順）興味がある方は当ミュージアムにお問い合わせください。

### 第二条 秋

#### 「天狗の絵巻」之巻

決行日 2009年10月18日(日)

### 第三条 冬

#### 「天狗の紙芝居」之巻

決行日 2009年12月20日(日)

### 第四条 春

#### 「大天狗展」之巻

決行日 2010年3月13日(日)～21日(日)

\*会場又は詳細については、当ミュージアムホームページにて随時ご案内していきます



## 秋の特別企画展 「この世界とのつながりかた」

会期 2009年10月24日(土)～2010年3月7日(日)

会場 尾賀商店にて同時開催

### 出展作家

秋葉シスイ

奥村雄樹

川内倫子

仲澄子

橋口浩幸

松尾吉人

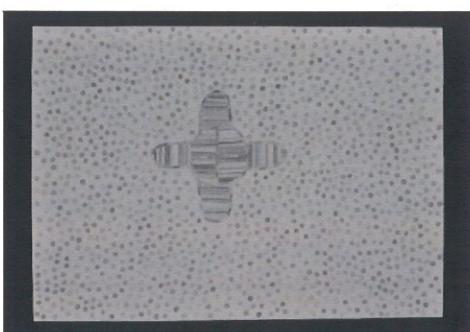
松本寛庸

森田浩彰

企画

保坂健二郎

(東京国立近代美術館研究員)



乱舞…星 松本寛庸 /2008

ネット文化の興隆や生活基盤の崩壊など、ドラスティックな変化の中で、私たちは、自分が生きているはずの「この世界」とはいったいなんなのか、自信を持てなくなっています。

そんなとき大事なのは私たちの内側にも「この世界」は広がっているのだと思い出してみるとことです。そして、生きるということは、ふたつの「この世界」をすりあわせていくことではないかと考えてみることです。

この展覧会には、そのような営みを繕々と続けている人たちを紹介しています。彼らの作品は、この世界を（美しさを潜めているがゆえに）積極的に肯定しようとする強さに満ち溢れていて、私たちが失いつつある自信を回復してくれるはずです。